内山竹林 (武司改め)

オリオン座凍てつく夜の初詣
初雪に鉢植の枇杷傾ぶきぬ
花みずきダイヤをつけた雨上がり
花突く目白の番隠れをり
七き妻と孫連れて来し夏祭
砂山を築けどさらふ夏の波
藪中の小滝の虫にヤマメ飛ぶ
三陸のリアスに碎く夏の波
如何にして登り来たらん空蟬ぞ
オホーツク羽ばたき降りて息白し

東北大鬼城句会に参加して

おおよそ、俳句なるものを詠む事になるとは、思いもよらぬ事であった。しかし第4回から「東北大鬼城句会」に参加させて頂いて、自然を観察する目が大きく変わった。四季の移り変わり、草花の成長、小鳥たちの飛来、雨・風の音や虫の音の強弱など見るとはなしに見て、聞くとはなしに聞いていても、それを心のうちで受け止めて、これはどう表現するのか？と自問しているもう一人の自分に気づく。社会の動きや、人間関係のことについて、あまり馴染まないで句作りは難しい。でも祭りごとや、孫たちのこと、亡き人のことは句にしてみたいと思う。また遠く離れた故郷のことや、幼き頃の思い出が、日頃の行いの中で、ふと偲ばれ、その情景を句にしたいなど思うことがある。

新会社を立上げ日も浅く、鬼城句会にはあまり参加してはおりませんが大変貴重な「新たな習慣」を鬼城句会は、私に与えてくれたと感謝しております。

村上君とは、川内での教養学部時代に、学生運動で「六十年安保闘争」を共に論議し戦った仲間です。その彼を「鬼城句会」で見た姿は、全くの別人に映りました。

口角泡を飛ばす口調は、いつしか、自然のささやき、人の息遣い、暮らしたの匂いを感じ取り、静かに、率直に表現する俳人となっておりました。彼が再び元気になり、もう一度共に語れることを祈念致しております。